【別紙１】

小笠原村立小笠原中学校令和７年度授業改善推進プラン

小笠原村立小笠原中学校
校長　　武内　亮

（１）令和６年度の取り組み状況に関する総括

	‘全国’…全国平均								「課題」全国平均以下					
	R7正答率	R7‘全国’		R7正答率	R7‘全国’	R6正答率	R6‘全国’		R7正答率	R7‘全国’	R6正答率	R6‘全国’	R5正答率	R5‘全国’
１年国語	*0.75*	0.65	２年国語	*0.71*	0.65	*0.67*	0.61	３年国語	**0.61**	0.61	*0.71*	0.65	0.65	0.59
１年社会	**0.53**	0.54	２年社会	0.49	0.46	0.53	0.52	３年社会	**0.44**	0.45	0.55	0.50	0.60	0.53
１年数学	0.71	0.67	２年数学	0.55	0.54	*0.71*	0.64	３年数学	**0.44**	0.53	0.55	0.55	0.74	0.66
１年理科	**0.50**	0.53	２年理科	**0.45**	0.49	0.68	0.67	３年理科	**0.46**	0.51	0.60	0.56	0.69	0.62
１年英語	*0.89*	0.81	２年英語	**0.50**	0.51	0.76	0.77	３年英語	**0.44**	0.52	0.43	0.53	0.86	0.83

村学力調査の本校の正答率と全国平均との比較の経年変化推移から、全体的に、学年が上がるにつれて横ばいや下降する傾向が見られる。学年別では３年生の全教科が全国平均を下回っている。昨年度喫緊の課題とされていた英語については、今年度は全国との比較上、やや差が縮まっている。教科別では理科の正答率が低くなっており、喫緊の課題と考える。なお、本校は学年の人数が少ないため、割合換算をした上で比較する際には、転入生および転出生が複数いる学年には特に留意が必要であり、その影響を大きく受けていると推察できる。

理科のカテゴリー別正答率		1年平均正答率％		2年平均正答率％		3年平均正答率％	
全国平均から２ポイント以上マイナス		校内	全国	校内	全国	校内	全国
基礎・活用	教科全体	***50.4***	52.6	***44.9***	48.7	***46.3***	50.8
	基礎	***52.1***	55.4	***45.5***	50.4	***41.4***	49.3
	活用	46.4	46.2	**43.5**	44.9	58.7	54.6
領域	物質・エネルギー	***41.2***	45.7				
	エネルギー			***37.8***	44.0	**47.6**	48.3
	粒子			**56.5**	58.1	**58.3**	60.3
	生命・地球	**56.5**	57.2				
	生命			***39.0***	53.4	**52.4**	54.6
	地球			42.6	36.4	***26.8***	40.0
観点	知識・技能	***53.3***	55.3	***39.4***	49.2	***43.4***	51.8
	思考・判断・表現	***45.5***	47.9	50.7	48.2	50.5	49.3
解答形式	選択	**44.5**	45.3	***52.6***	55.3	60.9	57.6
	短答	***57.9***	62.6	***35.3***	41.4	***36.2***	48.3
	記述	45.1	43.5	**29.4**	30.1	***28.6***	31.8

喫緊の課題である理科の正答率％を全国平均とカテゴリー別に比較してみると、学年により差があるものの、共通して「基礎力」および「知識・技能」の観点に課題がある。２年・３年の「知識・技能」は 10 ポイント近く下回っており、重要課題であると分析できる。また、短答式および記述式の正答率が大変低い。

３年生のカテゴリー別平均正答率％		国語		社会		数学		理科		英語	
全国平均より５ポイント以上低い		校内	全国	校内	全国	校内	全国	校内	全国	校内	全国
基礎・活用	教科全体	61	61.3	44.2	45.1	***44***	52.5	46.3	50.8	***44***	52.2
	基礎	65.3	66.6	43.6	46.1	***44.9***	55.8	***41.4***	49.3	***46.6***	55.9
	活用	51.8	49.9	45.5	43	42.3	45.7	58.7	54.6	***39.4***	45.9
観点	知識・技能	66.7	69.8	42.6	44.5	***46.6***	56.4	***43.4***	51.8	***47.3***	57.3
	思考・判断・表現	57.1	55.5	46.8	46.1	***38.6***	44.4	50.5	49.3	***39.6***	45.7

学年別にみて課題である３年生について、教科別正答率%を共通項目のカテゴリーで整理すると以上のようになる。数学や英語の積み重ねが必要な教科の基礎力が全国平均から下方に大きく乖離しており、家庭学習を含めた学習時間の充実について、学校側の取り組みが必要であると感じる結果となった。

これまで「指導と評価の一体化」の視点に立ち、授業改善に取り組んできたが、正答率向上には、つながらなかった。令和７年度、教科や区分による成果の違いを分析し、生徒たちにどのような力が必要なのかを視点に入れた授業改善にさらに取り組む。

（２）授業改善のための取組について

①課題の要因

本校では、確かな学力の向上を目指す方策として、基礎的・基本的な「知識・技能」の習得を図ってきているが、現状ではそれが学力調査の結果に結びついていない。生徒が「知識・技能」を習得できるようになるためには、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が必要不可欠である。

なお、正答率が全体的に低く苦手とする「思考・判断・表現」する場面を授業内で効果的に設計した上で指導・評価の実施が求められる。「指導と評価の一体化」の視点から、各学年の定期考査の分析やふりかえりなどによる、特性や学習状況の把握がより一層必要である。

②学校全体で取り組む事項

小笠原教育委員会教育目標実現のための授業改善に関する取り組みの重点である、「わかる」から「できる」を体感する授業を確実に実施するために、生徒の実情に応じた授業改善に取り組んでいく。具体的には、生徒が「知識・技能」を身に付け、活用する場面(例：基本的な用語の小テストの実施、身についていない学習内容に繰り返し取り組めるデジタル教材等の提供)を教科別に適切な方法で提供することが必要であると分析される。基礎的・基本的な「知識・技能」の習得により、生徒がまず「わかる」ことを体感する。その場面では、教師からの生徒に対する個別の支援やICTを活用した意見の交流・体験活動の実施など、技術的な支援やゲストティーチャーの導入を含め、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図る授業改善に取り組む。

それに加え、「知識・技能」を活用し、「思考・判断・表現」する場面を効果的に設計する。これは、「指導と評価の一体化」をふまえた各単元や内容のまとまりに応じた指導計画の作成によって促されるものである。

今年度も、生徒の実情に応じた授業改善に取り組む。現在作成中の、「内容のまとまり」に準じた指導計画や評価基準においても、「評価の観点」との関係を確認し、観点のポイントとともに、内容のまとまりごとの評価基準をふまえた授業を計画する。

また、小中高教科交流会等の機会を通じて、教科の専門性の向上の視点を教員がもち、それぞれの指導技術の向上に取り組むよう、管理職から促していく。

さらに、今年度も実施する小学校へのティームティーチングを活用し、義務教育９年間の学びの系統性の認識を深め、小中一貫教育充実のための方策として、小・中学校の内容の枠組みと対象を確認し、それをふまえた授業改善推進プランを作成する。